

此の考に對して賛否を表することを差扣えて、今は之を讀者の判斷に一任しなければならぬ。たゞ韃靼即ち Tatar といふ部族は唐の開元時代に於て默棘連可汗や闕特勤の碑文の突厥文で書かれたものの中に見えるやうに、當時三十部とか九部とか || 箭内博士は單に此の碑文に三十姓 Tatar の名が見える事を擧げたが、實は其の外にも *toquz tatar* 即ち九部 Tatar の名も見えて居る || 數へらるゝものがあり、遼金時代にも元朝秘史に名に見える四部、ラシッドの記せる六部遼史に見える九部など

## 賀名生の行宮について

### 一、緒言

吉野の賀名生は、南朝七年間の皇居の地である

があり、そうして此等遊牧部族の名稱體制などは甚だ判じ易からざるもので、阻鞬の如きも或は元の史臣が韃靼の名を避けて、北人の間に通用された韃靼の別名を用いたものに外ならぬではないかと考へ見るのも一つの解釋の方法であらうといふことを附記するに止めたい。

(1) 大正四年十二月、東京帝國大學文科大學刊、滿鮮地理歴史研究報告第壹。

(2) 大正七年十二月、同上第五。

### 大西源一

後村上天皇は正平三年の正月から同九年の十月まで、此の行宮におはしました。北朝の光嚴、光明、

崇光三上皇及び東宮直仁親王も、正平七年の六月から同九年の三月まで、賀名生に移されておいでになつた。賀名生は、云ふまでもなく、南朝の歴史上、吉野山に亞ぐ重要な所であるが、其の地に皇居を遷された理由と、其の皇居の位置とについては、從來まだ論じ盡されてゐないやうである。私は昨年の春、伊勢から草鞋がけで吉野山に登り進んで賀名生まで行つて見た。四月七日には、賀名生の奥の城戸じょうこを出發して、南朝に關係ある史蹟の殆ど總てを踏査し、夕方五條まで出た。今其の踏査の結果を基礎として、賀名生の行宮についての卑見を發表しやう。

### 一、後醍醐天皇の賀名生行幸

について

賀名生の地と南朝との關係を考へるには、どうしても後醍醐天皇吉野山行幸の初めまで溯らざる

を得ない。信すべき史料の示す所に従へば、天皇が花山院を脱出遊ばされたのは、延元々年十二月廿一日であるが、京都から吉野山へ何の路を取らせられたかと云ふことを考へて見ると、史料の上に現れた所では、少くも二つの路線が想像される。先づ太平記によると、梨間の宿を経て翌日の暮に内山へ御到着になり、それから賀名生を経て吉野山へ行幸あらせられたことになつてゐる。然るに天野山金剛寺古記には「十二月廿三日帝王入御阿那宇、同廿八日、吉野行幸給」とあつて、之を神皇正統記に「同十二月に忍て都を出まし／＼て、河内國に正成といひしが一族等をめしくして、芳野にいらせ給ひぬ」と云ひ、如是院年代記に「十二月、帝從楠木一類、潜入芳野」と記したのに參考すれば、天皇は京都から河内の楠木氏の赤坂城へ御着になり、更に楠木氏の護衛兵を従へさせられて、賀名生を経て吉野山へ遷幸になつたものと思

はれる。そこで此の兩説の何れが正しいかと云ふことを考へて見やう。

先づ太平記に見える梨間の宿と云ふのが、今の關西線の京都奈良線の長池、玉水兩驛の中間になる。それから内山は、櫻井線の丹波市驛から東方山寄り一里程の所で、石上神宮のついでに、維新前まで内山永久寺と稱する修驗道の寺院があつた。そのことを云つたものであらう。然るに此の時の天皇最後の御到着地點が吉野山であつて見ると丹波市附近から賀名生へ寄つておいでになることは甚しい迂回になる。尤も太平記に賀名生へ御着の時のことを記して「夜ノ曙ニ大和國賀名生ト云所ヘソ落着セ給ヒケル、此所ノ有様、里遠シテ人煙幽ニ、山深シテ鳥ノ聲モ稀ナリ、柴ト云物ヲカコヒテ家トシ、芋野老ヲ掘テ、世ヲ渡ル計ナレハ、皇居ニ成ヘキ所モナク、供御ニ備フヘキ其儲モ尋カタシ、角テハ如何有ヘキナレハ、吉野ノ大衆ヲ

語ヒテ君ヲ入進ラセント思ヒテ、景繁和氣景繁ナリ則吉野へ行向ヒ、當寺ノ宿老吉水法印ニ此由ヲ申ケレハ、滿山ノ衆徒ヲ語ヒ、藏王堂ニ聚會シテ會議シケル」と云つたのを見ると、天皇は宛然たる流浪の御身で、何のあてもなしに賀名生へいらせられた所が、荒涼たる山間の地で、如何ともなされ難かつたから、更に使を派して吉野の衆徒を語はせられ、衆徒が大命を奉じたが爲めに、愈吉野山へ行幸と云ふことになつたやうに見えるが、そんな間の抜けたことのあらう筈がない。天皇が伊勢の北畠氏と河内の楠木氏とを左右兩翼として、吉野山に南朝を打ち立てさせられることは、かねてより元老の親房公あたりと御相談の上で、祕密裡に其の御計畫を進めてゐられたので、もどく豫定の行動を取らせられたものと思ふ。此のことは親房公が神皇正統記に花山院入御の時のことを記して「十月十日の比にや、山門より還幸、いと淺猿

かりし事どもなれど、猶行末を思し召す道ありしにこそ」と云つたのを見ても、大體の想像はつくのである。猶親房公の考へでは、伊勢の方へ行幸を仰ぐつもりであつたらしいことが、翌る延元二年の正月一日付で奥州の結城宗廣卿に遣つた書簡中に「爲被果御願、可幸勢州之由被仰候也」とあるによつて想像されるが、其の伊勢行幸が實現されずして、吉野山に御駐蹕になつたことは、一つには河内の楠木氏との關係によることであつたと考へられる。

右の次第であるから、天皇が内山永久寺を経て吉野山へ行幸になつたものとすれば、其の御順路は、柳本、三輪、櫻井を經、多武峯越を上市方面に出で、櫻の渡を渡つて飯貝から吉野山へ登られるか若くは櫻井から右して飛鳥を過ぎ、高取から壺坂越を六田の渡に出られるか、此の二つの内の何れかを御通りになる筈である。内山から吉野へ

往くに五六里も西へ寄つて、紀州界の賀名生までも迂回せられる筈がないのである。どうも太平記の記事は、地理に合はぬ。尤も太平記によると、元弘元年に天皇笠置山を御没落の時にも、一時此の永久寺に入らせられたやうで、天皇には深い御縁故のある所のやうには思はれるが、吉野行幸の御途上、此の所を御通りになつたと云ふことは、信用し兼ねる。私は先年、其の永久寺の址へ往つて見たことがある。かねて大和名所圖會などを見て、堂々たる大寺院であつたことを知つてゐたが明治維新の際に寺領を失つて全く廢滅し、今日昔を偲ぶ何物をも存せず、唯雜草が茫茫として茂つてゐるのみであつた。

太平記の内山永久寺行幸説は、全く一個の空中樓閣であるが、賀名生へ行幸になつたことは確かである。此のことは太平記のみならず、梅松論にも「去程に君は大和國あなふといふ山中に御座の

よし聞えしかば、名詮自性然る可らずとぞ口々に申ける」と見えるから、疑ひのない事實である。

唯其の賀名生までの御道筋が、太平記などの云ふ所とは大分相違があるのだ。故藤田明氏の説によると、天皇は廿二日の巳の刻に法隆寺へ着せられて御晝飯を召され、未刻に出御あらせられて、河内の東條なる楠木氏の根據地に向はせられた。河内からは金剛山の南の千早峠を越えて、今の大和宇智郡なる五條町に出られ、それから賀名生へ入御の御順路であらうと云つて居られるが、如何にも藤田氏の言はれた通りであらうと思ふ。歴史地理十一卷三

「後醍醐天皇の吉野御遷幸につきて」參照此の時天皇が河内へ行幸になつたことは、前にも引いた親房公から結城宗廣卿に遺つた書狀中に「主上出御京都、幸河内東條」とあるによつても明かである。先づ河内の安全地帯へ行幸あらせられ、更に護衛兵を従へさせられて吉野へ行幸になると云ふことも、事前から親房公

と楠木氏との間に打ち合せの出來てゐたことゝ思はれるのである。

一説に天皇が賀名生に行幸になつたのは、高野山へ行幸の御計畫があつたからである云ふ。寶簡集に高野山行事の御下命があつたが、衆徒が拒んで御請けしなかつたのを、足利直義が賞した建武四年正月四日の文書が載つてゐるし、一面賀名生と高野山との地理的關係から考へて、そう推定することも不條理ではないが、私は高野山との御交渉は、花山院御脱出以前のことで、賀名生へ行幸になつた頃には、既に高野が命を奉じない爲めに、吉野山へ行幸のことに確定してゐたものと思ふ。要するに賀名生行幸は高野との關係ではない。南河内から吉野山へ赴かれるに、敵前に暴露せずして最も安全に到達し得られる路線は賀名生を経て丹生川(黒瀧川)の峽谷を泝行する所の山路を措いて外にない。賀名生は、即ち其の御順路に當つ

てゐるのである。

## 二、後醍醐天皇は賀名生の敷日を

何の所に御はしましたか

天野山金剛寺古記によると、後醍醐天皇は十二月廿三日に阿那宇<sup>○賀名生</sup>へ行幸になつて、廿八日にはもう吉野山の方へ御遷りになつてゐるから、賀名生に御滞在の日數は、中四日しかない譯である。かゝる短時日の間であるから、勿論新に行在所の新設など云ふ大袈裟なことはなさらなかつたであらう。さしあたり然るべき寺院へでも入らせられたことゝ思はれる。それは南朝の他の例を見ても、何時も皇居は寺院と定つてゐるからである。然るに『吉野舊事記』と云ふものを見ると、

堀大膳大夫信増

在加名生半郷

人皇九十五代後醍醐帝初加名生谷臨幸ノ時則和田邑孤山アリ三方者小河廻帶而岸涯甚尖也郷士以此山將鸞行

宮故先以堀孫太郎信増館而爲皇居宮成而移住也召孫太郎勅賜旗亦從四位下大膳大夫被任帝遷幸吉野山孫太郎隨遂而有戰功其子孫堀小治郎<sup>○中</sup>其子孫今ニ和田村ニ堀又左衛門某ト云者アリ從小治郎四代之孫也則又左衛門家者加名生皇居ノ室地也從帝拜領之諸品堀氏代々至今相傳ス皇居之山ニ有一鐘幅一尺五寸長二尺一寸五分康永元年壬午八月日祐實勤進入ト銘アリ亦河内國高福寺トアリ。

とあつて、和田の孤山に行宮を建てられるまで、堀孫太郎信増の家を以て皇居とせられたことになつてゐる。元祿二年に吉野若清水菴主梁山人<sup>○盤珪禪師</sup>の書いた賀名生略記にも、これと同じやうなことを云つてゐる。又堀又左衛門由緒には、

先祖堀孫太郎信増代に 後醍醐天皇帝都より此所へ落させ比ふ此は延元元年十月廿八日夜着御させ給ひ當家を皇居になし奉る然りさいへ芝山里にて萬事ふつゝか成によりて吉野山の大家をかたらひ同年十二月二十一日彼山へ行幸なし奉るにて其をり堀孫太郎を岸上大

膳太夫ミ勅許を蒙り父子共供奉し奉る 天皇は延元三年八月十六日崩御正平四年 後村上天皇吉野より賀名生へ遷幸の時三社御神號の御旗並鷹羽の大旗を岸上内藏頭信通へ下し給ふ其時亦堀の家を皇居ミなし奉る其をりうへの山を切ひらき黒木之御所を造立し慶藏院ミ號す。

とあつて、後醍醐天皇は全然堀氏の家を行在所になされ、後村上天皇も黒木御所の落成するまで、同じく堀氏に御駐輦あらせられたとしてゐる。それから和州郷士記には「吉野郡、阿野堀源兵衛、加名生村トモ云、後醍醐後村上二代皇居也今ニ御所ト云」と見える。郷士記は寛永以前のもので、これが堀氏のことを書いた最初のものであらうと故田中義成博士は云つて居られる。〔歴史地理四卷三號 賀名生皇居の址〕和田は即ち賀名生の峽口に位置する所の一部落である。其の村の入口には西の方から延びて來た山の尾根が横はつてゐて、吉野の奥の方から賀名

生の峽底を流れて來る黒瀧川がそれに遮られて、甚しい迂回をなしてゐる。従つて尾根の尖端は北と東と南との三方に黒瀧川の流を繞らした形勝の地で、恰も賀名生谷の關門を扼すると云ふ形をなしてゐる。即ち前に引いた吉野舊事記に「和田邑孤山アリ三方者小河廻帶岸涯甚尖也」と云つたのが、此の所のことである。宇智郡五條町方面から黒瀧川の左(西)岸に沿ふて上つて來た道は、此の尾根を越えて、初めて賀名生の谷へ入り込むことになる。峠の切割の所から南を望むと、賀名生谷の主要部が一目に瞰下される。峠から左(東)の方は尾根の上が拓かれて、平坦になつてゐる。昔し華藏院と云ふ寺があつたと傳へられるのは、即ち此の平地の上である。黒木の御所の址と云ふのも此の處のことである。寺址の東方は、岩崖が直に黒瀧川に臨んで欹ち、容易に接近が出来ないほどである。此の華藏院址のある丘脈が、賀名生の谷

を守護する上に如何に重要なるものであるかは、地形を一見すれば、何人にも容易に首肯されやう而して彼の堀氏の邸宅が、直に其の南麓に接して建てられてゐるのである。

華藏院のことを初めて書いたのは元文元年に關祖衡が著した大和志で、

後醍醐帝皇居 在加名生莊和田村傍有華藏院址古鐘勒曰河内國高福寺鐘康永元年八月錦里人云昔日楠氏獻焉

と見える。吉野舊事記や、此の大和志に記した康永の古鐘は今堀氏の所有に歸してゐる。林海音氏の南朝遺蹟吉野名勝誌によると、明治三十三四年の頃までは、寺址に鐘樓が一字遺つてゐて、康永のとは別の新しい鐘が懸つてゐたやうであるが、今ではそれもなくなつて、附近は全く遊園化し、茶店が出たりしてゐる。其の東隅に、近頃問題の北畠親房公の墓などと云ふものがある。華藏院なる寺院が何の時代に草創され、何の時代に廢滅したか

は、固より記録上の徵證がないが、少くも後醍醐天皇が賀名生に行幸あらせられた延元々々年以前からあつたもので、天皇は賀名生に於ける數日間を此の寺内で御過しになつたものと思ふ。堀信増が此の所に黒木御所を造營し奉つたとか、後に其の御所址を紀念せんが爲めに寺を建てたのが華藏院であるとか云ふ傳説は、固より一顧にも値せぬ。當時戰亂の世に於て纔かに數日の御滞在に黒木御所などを新築しそうなことがない。こんなことは常識から考へても、わかり切つたことである。又聖蹟を紀念せんが爲めに寺を建てるなど云ふことも、理窟の通らぬ話で、紀念するだけならば、何も態々寺などを建てるにも及ばぬ。これらは皆、泰平の世の思想から考へ付いた空言に過ぎない。堀氏の家は一見した所、如何にも古郷士の住宅を偲ばせるやうな構へではあるが、果して南北朝までも上る舊家であるかどうか分つたものでなく、



堀信增など云ふ勤王家も、一向當時の實録には現れない人である。賀名生の地に後醍醐天皇が行幸になり、後に後村上天皇七年間の行宮を置かれたことを思ふと、この郷士等が無二の南朝方で、忠勤を抽でたことは想像ができるが、それが果して堀を名乗る武士であつたかどうかは、何とも申し兼ねる。後醍醐天皇行幸の時、此處の然るべき郷士の家で御休憩になつた位のことではあり得ると思ふが、それが今の堀氏の家其のものであつたか如何、勿論斷定は出来ない。元來堀氏のことゝが記録に現れるのは、江戸時代に入つてから後のことで、其の以前のものには嘗て見えない。殊に堀又左衛門由緒に延元々年十二月廿八日賀名生着御としたのは、明かに時日を誤つてゐる。要するに上に掲げた堀氏關係の史料は、何れも史的價値の乏しいものばかりである。然るに慶應四年五月朔日付を以て大和國鎮撫總督府から堀氏に下した達

書には「大和國加名生郷堀孫太郎居宅地邸往昔後醍醐天皇後村上天皇後龜山天皇爲行在所而祖先忠臣之由ヲ以右繪圖面中六石六斗三升之租稅此度被免候事」と載せられ、明治十六年三月二日付、宮内卿徳大寺實則の名を以て、行在所保存金貳百圓を下賜された。これは堀氏に對しては過分の恩典であるが、局外者からして冷に之を見れば、堀氏の家を古行宮と稱するが如きは（堀家の長屋門には、天忠組の志士吉村寅太郎が書いた古行宮の額がかゝつてゐる）聊か僭越ではあるまいかと思ふのである。

私は堀氏一門が大なる誇とする後醍醐天皇行在所の傳説を強て抹殺しやうとも思はぬが、進で之を斷信するだけの勇氣を有たない。

### 三、後村上天皇の賀名生遷幸

後醍醐天皇が吉野山に行幸あらせられてから以

後十二年、賀名生の地に何事があつたか、歴史の表面には現れて來ない。其の間吉野山では、後醍醐天皇が終天の遺恨を齎して神去りまし、後村上天皇の御即位を見た。吉野の前衛たる河内では、大楠公が湊川に戦死せられてから、小楠公が乃父の遺志を繼承して南朝の藩屏となられたが、正平三年正月、此軍大舉して來り侵し、小楠公之を拒で克たず、終に四條畷の露と消えられた。勝ち誇つた高師直の前軍は勢に乗じて、正月廿四日に吉野の皇居を襲ふた。是より先後村上天皇は、吉野山の終に保たざることを知られて、潜かに賀名生に遷幸あらせられた。これから七年に近い間、賀名生が南朝の根據地になるのである。此の時の事情は、阿蘇文書の二月六日左少辨正雄奉、中院義定に下し賜ふた繪旨に「抑去月五日河州合戦、官軍依失利、凶徒襲申吉野之間、當山要害難義非一仍被改御座、臨幸紀州候也、其後凶徒雖入彼山、

衆徒堂衆郷人等致合戦、無程令追出畢、此間事定驚遠聞乎、然而御座地堅確、爲籌策非無其利、且河州和泉本陣無相違陀○宇陀宇智、紀伊衆、勢州等御方、同以所致忠節也」とあるによつて明である。

京都の方では、天皇の御落ち延びになられた地點に就て色々の流説が行はれたものと見えて、醍醐地藏院日記には「卅日、吉野帝御遷座于阿豆河入道城云々」と記し、玉燭寶典の裏書文書には「吉野もとつ河へ宮も御おち候之由其間候」と見える。彼の成島良讓が『南山史』に「癸卯、大納言藤隆資斂敗兵、還行在、帝避紀伊阿瀬川城」と記したのは、『地藏院日記』に依つたのであらう。又大日本史料の綱文に「正平三年正月廿四日高師直ノ前軍吉野ヲ攻メテ是日之ヲ陷イル、陷ルニ先チ後村上天皇紀伊ニ幸シ給フ」とあるは、阿蘇文書に據つたのであらう。然るに太平記には「四條中納言隆資卿、急キ黒木御所ニ參テ、昨日正行已ニ討レ候

又明日師直皇居へ襲來仕ル由聞へ候、當山要害ノ便希ニシテ、防ヘキ兵更ニ候ハス、今夜急ギ天河ノ奥賀名生ノ邊へ御忍候へシト申テ」云々とあつて、明かに賀名生へ潜幸のことを記して居るのである。

私は、此の後賀名生の地が久しく皇居となつてゐた事實から推しても、又古今消息集に載せた佐野氏綱の軍忠狀其の他に、師直が二月早々宇智郡方面に發向し、南軍と戰つたことを記したのを見ても、此の時天皇の落ち行かれた先は、賀名生であつたと確信するのである。それは軍忠狀等に見える宇智郡が賀名生谷の關門である地理上の關係からしても、異論を容るゝの餘地がなからう。茲に於て彼の阿蘇文書に「臨幸紀州」と云ひ、地藏院日記に「御遷座于阿豆河入道城」と記したことについて、一言無きを得ない。

地理を按ずるに、賀名生は大和吉野郡の西北に

窮る所で、其の背後は、直に紀伊の伊都郡なる富貴谷に接する。現に常樂記の北畠親房公薨去の條を見ても「於紀州賀名生圓寂」とあつて、賀名生を紀州としてゐる。それは勿論誤りであるが、當時の人々は、實際此の賀名生を紀州と思つてゐたのである。されば阿蘇文書に「紀州臨幸」と書いたのは、實は賀名生臨幸であつたのである。

猶當時の人々をして、此度の行幸地を紀州であると思はせたことについては、他に今一つの有力な理由がある。それは此の行幸に關し、南朝方が非常に力にされてゐたらしい阿豆河○阿入道○河が紀州在田郡の人であるからである。それで最初天皇が吉野山を御没落になつたと聞いた時に、それはつつきり阿豆河入道の城へ落ちられたに相違がなからうとの流説が行はれて、さてこそ地藏院日記にも「御遷座于阿豆河入道城」なども書いたのだらう。阿豆河は、即ち紀伊の在田川の上流、大和

吉野郡に近い阿瀬川莊で、湯淺氏の根據地である。其の上流は、伊都郡の花園莊になり、其の南の方は、湯川莊になる。何れも吉野郡の十津川郷と腹背の地である。此の附近が南朝黨の巢窟であつたことは、正平十五年に四條隆俊が紀伊に義兵を擧げた時に、阿瀬川城に南黨が據つたことや、南北合一の後、南朝の皇胤が亦、此の城に據つたのもわかるのである。

#### 四、皇居を賀名生に定められた理由

##### (一)地理上の形勝

南朝が賀名生に據つたのは何故であるか。之を考へるについては、先づ(一)賀名生其の所の地理上の形勝と(二)其の背面を包擁する紀伊の勤王黨との關係を見なければならぬ。抑も南朝が吉野山の偏隅にあつて、あれだけの間を支へ得たものは、其の背面なる紀州の山地が安全を保障してゐ

たからである。地圖によつても知られる如く、吉野から紀州方面へ通ずる大道が二つある。一は上市から川上郷及び北山郷を経て、奥熊野の本本へ出て行くもの、一は五條から十津川を経て、熊野の本宮へも、又高野山方面へも、在田、日高方面へも出て行く。二條の内では、勿論後者の方が重要である。十津川には、曩に大塔宮が依らせられた歴史があり、北山、川上には、南北合一の後、南朝遺孽の諸王が神璽を擁して潜伏され、赤松氏の遺臣の爲に害され給ふて、南朝皇胤の絶滅を見るに至つた悲壯の歴史がある。而してそれが何れも紀州の山岳地帯を背景としたのは、注意すべきことである。

十津川郷に入るの關門とも稱すべき所は、實に賀名生の地である。賀名生谷の南境は、大和アルプスの方から西の方へつゞいて來てゐるかなり高い山脈を隔て、十津川の上流なる天川郷に接し

てゐる。賀名生から今自動車の通ふ天辻峠を超え  
ると天川の坂本と云ふ所で、そこを右に取れば高  
野山の奥の院に出で、真直に南へ川に沿つて下つ  
て行けば、十津川郷へ入つてゆく。されば吉野御  
没落の時のことを玉燭寶典の裏書文書に「とつ河」  
へ御落ち云々と書いたのも、大體に於ては誤つて  
ゐないのである。賀名生の和田までは、五條の町  
から二里ばかりある。賀名生から熊野街道を右に  
入ると、富貴を経て高野山へ行ける。其の距離は  
五六里に過ぎない。熊野街道を黒瀧川に沿ふて南  
進すると、黒淵を経て宗檜村の城戸に達する。黒  
瀧川の本流はそこから東に折れて、銀峯山の南の  
谿あひをすつと入り込んでゐる。川に沿ふて浜る  
と、丹生郷を経て吉野山へ出て行く。賀名生は山  
間の地ではあるが、かく交通の要衝に當つてゐる  
勿論其の地形は藥研の底のやうな谿底であるから  
大軍を以て攻撃しやうと思つても、兵を動かすこ

とが出来ない。寡兵を以て楯籠るには、實に究竟  
の形勝地である。而も僅々二里で吉野川本流の沿  
岸平地へも出られ、川を渡つて北進すれば、直ぐ  
大和平野である。所謂守るに易くして攻むるに難  
い天然の城塞地帯で、殊に其の背後なる天ノ川か  
ら十津川へかけての大谿谷と、龐大なる紀州の山  
岳地帯とは、最も安全なる最後の避難地を提供す  
る。即ち志を得ば直に大和平野に進出して、一路  
京洛を指すべく、志を得ざれば、退て天ノ川、十  
津川の險に據ることが出来る。賀名生が軍事上如  
何に重要な地であるかは、吉野の行宮を侵した師  
直の軍が更に賀名生の攻撃に向つたが、終に目的  
を達せずして、退却したのを見てわかる。又明  
治維新の前に於て、天誅組の志士が兵を五條に擧  
げ、事成らずして十津川に退くに當り、先づ此の  
地の險要に據つて、最後の一戦を試みたのでも知  
られる。上に引いた阿蘇文書に「御座地堅確爲御

籌策非無其利」とあるのも、決して過言ではない。

## (二) 其の背面との關係

南朝が賀名生に據つた理由の大部分は、之を其の地の形勝に歸せねばならぬが、其の背後に一の大なる勢力のあつたことを見逃してはならない。それは紀伊の湯淺氏が阿瀬川○阿城にゐて、しつかりと其の背面を防禦してゐたことである。湯淺氏が延元以來、南朝方として忠勤を抽でゐた有様は太平記の後醍醐天皇吉野山へ行幸の條に「紀伊國ニハ恩地性河貴志湯淺○按、恩地、性河、貴志は紀伊に非ず、河内武土なるべし。五

百騎三百騎引モ切ラズ面々馳參ケル間雲霞ノ勢ヲ腰輿ノ前後に圍マセテ無程吉野へ臨幸ナル」と云つたのを見ても明である。足利氏は、紀伊の南軍を懼れた。直義は院宣を奉じ、直冬を遣して之を討たしめんとし、書を飛ばして其の黨を招いた。

るに臨みて、祇園の社僧をして祈禱せしめ、祇園社 記續錄

直義は高野山金剛峯寺に祈禱を、東寺に大般若經の轉讀を命じ、高野山文書、東寺文書、義詮は山城の觀勝寺を

して大威徳法を、鶴岡八幡宮をして愛染王護摩を修して戦勝を祈らしめた。古今消息集、鶴岡社務記録、足利氏が

かく大騒ぎをした所を見ても、紀伊の南黨が一大勢力であつたことが知られる。而して紀伊南黨中の尤なるものが阿瀬川の湯淺氏であつたことは云

ふまでもない。九月四日阿瀬川城陥落し、同二十八日に直冬は軍を收めて還つた。

抑も南朝が其の背面の經略に重きを置かれたことは、之より先延元二年の正月二十四日に天河郷の課役を免除せられ、大和天河郷文書、○正平五年の八月廿三日にも亦同様の恩典があつた。

同三年の正月十八日、紀伊花園上莊の郷人に軍忠を勵まされ、津川文書正平三年二月六日、中院義定に

賀名生遷幸の事を報じ、將に熊野等の兵を集めて再舉を謀らんとすることを告げられ、河蘇八月四日

花園の郷士に令して兵を出さしめられ、紀伊脇同七日、紀伊の近露六郎の勳功を賞して、備前吉永保五分一の地頭職を賜ひ、紀伊野長正平四年閏六月十三日、神河郷民等が吉野及び安藝郷の城を攻めんとするにより、十津川郷に令して之を撃たしめられ、十津川同六年七月七日、天河郷の河合寺に祈禱を命ぜられ、又同郷の升米を以て、河合寺造立の資に充てしめられ、天川郷同年九月二十九日、紀伊白鬚黨の所領葛城山芋畑村の公事を免せられた、紀伊續風土記のを見ても知られる。彼の『太平記』に賀名生を天河の奥と記したのは、たしかに口の誤であるが、當時の人が賀名生に關して直に天河を聯想し來つたのを見ても、其の間に最も密接の關係があつたことを考へられるのである。

猶此の問題と關聯して誰しも直に心付くことは彼の高野山の宗教上、經濟上、軍事上に於ける大勢力であらう。南朝に於て其の大勢力の利用に腐

心されてゐたことは、勿論の次第である。それは後醍醐天皇が吉野行幸の初めに於て、宸筆の願文を納められた寶簡のでもわかる。否豫定の御計畫では先づ高野山へ行幸の筈であつたのである。のみならず、是より先、吉野城が陥つた時、大塔宮が高野山へ落ちられてゐる。又延元二年の三月には、高野山寂靜院をして大和衣部莊を安堵せしめられ、同十二月には金剛峯寺をして三善資連の寄進地を領せしめられ、高野山正平六年の四月には、山内の寶生院順連房に、天野社壇の修理料として政所の關所を領せしめられた。三寶院要するに、南朝が賀名生に據つた半面の理由は上來記述し來つた背面との關係を觀察せずしては了解されないものである。

#### 五、八幡の親征から天野遷幸まで

正平六年、尊氏直義と争ひ、之を討たんが爲に

鎌倉に下つた。南朝は、此の虚に乗じて京都を回復せんことを計畫せられ、一時の權謀を以て北朝との間に和議を調べ、十一月七日には、北朝の天皇及び東宮を廢された。此の時穴太の字を改めて賀名宇と稱せられたことが皇代記に見えてゐる。

尋で十二月二十三日には其の神器を收め、二十八日には、光明、崇光兩院に太上天皇の尊號を上られた、京都の公卿は、賀名生の朝廷に參候した。

翌七年の二月二十六日、後村上天皇は愈賀名生の行宮を御發遣あらせられ、二十八日、住吉へ行幸になり、閏二月十五日天王寺を経て、十九日、八幡の行宮に進ませられた。かくて北畠顯能、千種顯經、楠木正儀等の諸將は兵を卒ゐて京都に入り義詮を京外に驅逐し、光嚴、光明、崇光三上皇及び廢皇太弟直仁親王を八幡に迎へ奉り、親房公は京都に入つて萬事の指揮を取つた。三月三日には三上皇以下を河内の東條に御遷し申した。此の如

く、南朝の軍は一時大に振つたが、五月十一日、湯河莊司が義詮の軍門に降を請ふに及び、八幡の守終に保たずして、主上再び賀名生に還御ましますの止むを得ざるに至つた。八幡から賀名生への御順路は、三輪から宇陀水分宮を御通りになつて居る。宇陀水分神社と稱するものは、宇陀郡榛原町と古市場との二ヶ所にあるが、多分古市場の方であらうと思ふ。何れにしても、宇陀郡を御通過になることは甚しい迂回であるが、宇陀郡は伊勢の北畠氏の勢力範圍で、安全地帯であるから、さしあたり此の所へ入らせられたものであらう。

湯河莊司は、所謂熊野八庄司の一である。當時其の湯河莊司なるものが南朝方から如何に重視されてゐたかは園太曆に「熊野湯河莊司此間顯能卿專一官軍也」と云ひ、其の裏切によつて八幡の南軍が瓦解したのでも知られる。湯河氏は、紀伊の在田日高二郡に蟠踞した豪族で、其の本據は、前



にも述べた阿瀬川の隣接地であるが、後には日高郡の御坊附近へ移つたものらしい。阿瀬川城は陥落しても、其の附近には猶、南朝に心を寄せるもの、絶えなかつたのであらう。然るに其の首領の

湯河氏はどうく寝返りを打つて足利氏に通じ、

義詮から紀伊に於ける岩田、日高、河上諸城の戦功を褒せられたりなごしてゐる。湯河文書

後村上天皇既に賀名生に還御になり、北朝の三上皇と廢太弟とを河内の東條から賀名生に移し參らせ、尋で其の女房方を京都から賀名生に召させられた。正平八年二月、北畠顯能兵を卒ゐて宇陀郡に入り、四條隆俊楠木氏の兵を卒ゐて紀伊方面の義軍を鼓舞し、京都は再び楠木正儀等の手によりにて回復せられ、南朝還幸のことが再び問題に上つたが惜哉終に實現を見るに至らず、南巡の駕長へに還るの機會を逸した。かくて正平九年の四月十七日に南朝の柱石北畠親房公が賀名生に於て薨

せられ、十月二十八日には、後村上天皇賀名生を出でまして、河内の天野山金剛寺へ還幸あらせられた。

南朝が七年間皇居の地であつた賀名生を去られねばならなくなつたのは、どう云ふ事情があつたのだらう。思ふに紀州の南軍が瓦解し、湯河庄司の如きも敵に降つて、賀名生の背面を脅すやうな状態になつて來た所へ、親房公が薨去されて南朝の求心力が弱くなり、周圍の形勢が賀名生の皇居を危険に陥れた爲めなのであらう。北朝の三上皇は之より前、正平八年の三月に金剛寺に移され給ひ、光明法皇は正平十年に、他の二上皇は十二年に京に還らせられた。太平記に賀名生の皇居に遺された建築物や公卿等の邸第は、正平十五年陸良親王の爲めに焼き拂はれたとある。

花營三代記を見るも、此の後應安六年○南朝文八中二年月の條に「二日、南方奉讓位於御舍弟宮之間、相

副三種神器没落吉野云々」と記してゐる。此の吉野を、大草公弼の南山巡狩録に賀名生のことであらうと云つてゐる。此の月十日、天野の皇居敵の襲ふ所となり、四條中納言。隆俊なり戦死し、南朝は再び賀名生に移られたものであらう。是より先正平二十四年の頃にも、こゝに御座したことは、新葉集雜の部、中宮の御歌の詞書に依て想像される。此の後のことは明でない。

賀名生の皇居は、かくして廢墟に歸した。

## 六、賀名生皇居の位置

賀名生皇居の御有様は、如何のものであつたらう。彼の太平記に、

吉野ノ主上ハ天河與賀名生ト云所ニ、僅ナル黒木御所ヲ作テ御座アレハ、彼唐堯虞舜ノ古、茅茨不剪、柴緑不剗、淳素ノ風モ角ヤト思知レテ、誠ナル方モ有ナカラ、女院皇后ハ、柴葺庵ノ怪シキニ、軒漏雨ヲ禦兼、

御袖ノ涙ホス隙ナク、月卿雲客ハ、木ノ下岩ノ陰ニ松葉ヲ葺カケ、苔ノ筵ヲ片敷テ、身ヲ置宿トシ給ヘハ、高峯ノ嵐吹落テ、夜ノ衣ヲ返セトモ、露ノ手枕寒ケレハ、昔ヲ見スル夢モナシ、況其郎從眷屬タル者ハ、暮山ノ薪ヲ拾ヒテハ、雪ヲ戴クニ膚寒ク、幽谷ノ水ヲ結テハ、月ヲ擔フニ肩ヤセタリ、角テハ一日片時モ有ナカラヘン心地モナケレ共、サスカニ消ヌ露ノ身、命アラハト思フ世ニ、憑テ懸テヤ殘ルラン。

と云つたのは、大體想像で書かれた感傷的の文章で、まさかそんなでもあるまいと思はれるが、極めて御みじめに御生活であつたことは、申までもなからう。それにしても皇居は、賀名生谷の何の邊にあつたのだらう。前にも引いた和州郷土記には、和田の堀氏の家を以て後醍醐、後村上二帝の皇居であるとし、堀又左衛門由緒には、後に和田の所謂黒木御所、即ち華藏院の地に移られたと記してゐる。然るに大和志には「後村上帝皇居在黒淵村俗呼黒木御所傍有總福寺故址」とあつて、大和名所圖會なども、それ

に従つてゐる。堀氏の邸宅を以て皇居に擬するが

如きは、固より取るに足らぬが、華藏院説も從ひ難い、前にも云つた如く、華藏院址は形勝の地ではあるが、其の位置たるや、賀名生谷の門戸に當り、一朝五條方面より敵の攻撃を受けることになれば、第一着に鐵火を浴びねばならぬ地點である之を攻撃軍の方より云へば、此の華藏院の鬨門を抜くに非ずんば、軍を賀名生の谷に進めることは出來ないと同時に、防禦軍より云へば、此の要害にして一旦敵手に占領されたなれば、賀名生の谷は最早一刻も支へることが出來ないのである。華藏院址は、賀名生の防禦陣地としては、他の何ものにも換ふべからざる重要な地點ではあるが、皇居の位置としては、最も不適當である。後醍醐天皇の時の如く、僅々數日間の御滞在であるならば免も角も、かゝる敵火に觸れ易い危険地に七年間も皇居があつたとは、どうしても考へ得られな

いのである。

次に黒淵の黒木御所址、即ち崇福寺址○崇一に總に作るについて觀察しやう。賀名生の谷は和田、北曾木を門戸として、大日川、向賀名生とつゞいてゐるが黒淵だけはそれから一里近くも離れて、宗檜村の境に接近してゐる。黒木御所址と稱する所は、大日川から熊野街道を南進して、黒淵の内の字馬路まぢの小部落を對岸に望みつゝ、將に其の本村に達せんとする手前の低い峠の頂から東へ、屋根の上を一町ばかり下り込んだ所で、そこには面積三畝歩許の小平地があつて、其の中央に、椿の大木が一本立つてゐる。地形は西の方から次第に低下した丘の腹で、其の山脈の尖端は、そこからまで二町ばかりも延びて、黒瀧川の西岸に達してゐる。黒瀧川が此の山趾に遮られて、南から東、東から北へと甚しく迂回してゐる具合など、全く和田の華藏院址そつくりであるが、地の形勝に於ては、華

藏院址には及ばぬ。勿論其の平坦地の面積は、大建築を容るゝの餘地なく、寺と云つても、極めて小さな草庵位のものが立つてゐたのであらう。行つて見ると、果してこんな所が皇居であつたのだらうかと頭を傾けさせられるやうな所である。

私は黒木御所址を強て否認しやうとも思はぬ。或る機會に於て、そこが暫く後村上天皇の皇居に充てられたことがあつたかも知れぬと思ふ。併し七年間行宮の地はごうも黒淵あたりではありそうに思はぬのである。若し人ありて、然らば他により有力なる地點を物色し得るかど反問されるならば、私は言下に答へて、向賀名生なる鎮國寺の地即ち是なりと云はう。

## 七、鎮國寺址即行宮址

鎮國寺のことは吉野舊事記に「傳曰加名生郷神野山向加名生鎮國寺不動院者後醍醐帝祈願所也本尊邑ニアリ

ハ空海ノ作二童ハ爲春日作矣」と見え、大和志に「鎮國寺在加名生莊向加名生村」と記してゐる。其の地形が北方から低下し來つた屋根の上で、黒瀧川がそれを避けて大迂回をなしてゐる所など、全く華藏院址や崇福寺址と同一である。かく同一の地形に申し合せたやうに寺院のあつたことは、賀名生の史蹟を考へる上に於て、甚だ重要なことである而して其の寺の位置が、何れも城郭若くは防禦陣地として究竟の地であることは、最も注意に値する。故田中義成博士が嘗て賀名生の史蹟を論じて鎮國、華藏、崇福三寺に注意されたことは、大なる卓見である。さりながら「華藏院の邊を後醍醐帝の宮址とし、崇福寺の邊を後村上帝の宮址と傳へたるは、蓋し故なきにあらず」と云つて、暗に黒淵説を取られる如き口吻を洩らされたのは、博士の爲に惜むべきことである。思ふにかゝる險要の地に三寺院を置かれたのも、他日有事の日に備へん

が爲めに、早くから南朝に於て計畫された祕策なのであらう。南朝に於て寺院を城郭に使用されたことは、山城の笠置城、奥州の靈山城のやうな著しい例證がある。

賀名生の三寺の内では、崇徳寺は形勝に於て最も劣り、鎮國寺は最も勝れてゐて、地域も廣い。否賀名生の峽谷中に於て、鎮國寺の占居地の如き形勝は他に之を求め難いのである。殊に鎮國寺は後醍醐天皇の勅願寺であつたと傳へられ、華藏、崇福二寺の早く廢して何物をも存せぬ今日に於てさゝやかなりとは雖も堂宇を存し、其の附近二三町の間には古い屋敷跡らしい所があちらこちらにあつて、礎石などの遺つた所もあると云ふことを林氏が吉野名勝誌に書いて居られる。此等は供奉の公卿達の住居の跡であらう。以上の事實から推しても、鎮國寺の地が當時の皇居であつたことを考へしむるに足るのみならず、之を地理及び道路

網の上より考ふるに、鎮國寺の地は恰も賀名生谷の中心にして、そこから黒瀧川を隔てた對岸の大日川は、紀州の富貴を経て高野山へ行く道や、長坂を経て天辻の方へ出て行く道路の分岐點になつてゐる。此等の點から考へても、南朝の皇居はさうしても、鎮國寺であつたと思ふ。

鎮國寺が皇居であつたなど云ふことは、固より何の書物にも記されてゐない。しかし私は、其の書物に記されてゐないのが、却て眞を得たものであらうと思ふのである。全體吉野ほど偽史蹟、偽文書、偽記録の多い所はないので、迂濶してゐると忽ち其の渦中に巻き込まれ、偽物の爲に胡魔化されて了ふ。鎮國寺皇居のことが如何はしい記録に累されずして今日に至つたのは、最も幸福であつた。記録はなくても、山河の形容が昔を語る黒淵崇福寺の黒木御所址のことを記したのは享保の『大和志』が初めて、吉野舊事記には、まだ何事

も書いてゐない。そこを後村上天皇の行宮址に擬すること、極近世になつてから云ひ出したことなのであらう。私は重ねて云ふ、賀名生の皇居は斷じて鎮國寺の地である。

鎮國寺の草創年代は、他の華藏院、崇福寺等と共に全く不明であるが、姑く私をして想像を逞くすることを許されるならば、それは後村上天皇が賀名生に遷幸の初めに於て特に鎮護國家の御祈願の爲めに御建立あらせられたもので、同時に其の寺内を皇居に定められたのではあるまいか。それは彼の吉野舊事記や大和志に鎮國寺を後醍醐天皇の勅願所と云つたのにも思ひ合されるが、其の後醍醐天皇は、恐く後村上天皇の誤傳であらう。しかし黒淵の崇福寺址を黒木御所址と云ひ傳へてゐるのも、全く據のないことではないかも知れない。或は鎮國寺の建築工事の竣工するまでの間、以前から存在してゐた崇福寺を以て假の御座所に宛て

られたのもあらう。

猶賀名生の皇居に關聯して一考を要するものは正平七年から九年まで三年間、北朝の三上皇と廢大弟とが遷されてゐられた其の御幽居の地點である。私はそれが或は崇福寺あたりであつたのではなからうかと思ふ。故北畠治房男は其の著伊勢國司源顯能傳略や古蹟辨妄に於て、和田の華藏院址を以てそれに擬せられたが、既に本稿に於て私が縷述した如く、彼の地點は賀名生谷の最外側で、敵黨の爲に容易に之を奪還される虞があり、且御脱出にも最も御便宜の地である。かたゞ以て、あのやうな所にさる重い方々を置き奉られたとは考へられないのである。此の點に於ても、崇福寺の方が遙に有利の地であることが知られやう。

#### 八、明石山禪源寺

賀名生の奥の宗檜村大字坂卷に、明石山あかしと云ふ

所がある。その禪源寺は、後醍醐天皇の歸依僧であつた三光國師の開基と稱せられてゐる。即ち吉野舊事記に「宗川郷坂卷邑瑞石山禪源寺者由良之法燈圓明國師之二世雲樹三光國師之開基也」略○中昔當山夜々有放光石故以號瑞石山矣瑞石山禪源寺之額者後醍醐帝之宸筆也」と見えるのである。

其の禪源寺の建築物は去る大正十三年の十一月に火災に罹つて全焼し、今では假屋である。そこは熊野街道から左へ十五六町も登つた高い山の上で、脚下に賀名生の峽谷と僻處すべく、殊に南方の天半に一大バノラマの如く連互した天ノ川境の大山脈に對する雄大なる眺望は、一寸他に類がな

い。其の地形は賀名生の詰の城として最も理想的の所である。若し賀名生の皇居が危険に陥つたならば、主上を此の天險に迎へ奉るべく、それでもいけなかつた場合には、背後の天ノ川、十津川へ據らう。恐くこれが南朝の祕策であつたのではあるまいか。私は之を南朝の寺院城郭政策から考へても、將た又親房公の智謀絶倫であつた點から考へても、賀名生の朝廷に於てそれ位の周到な用意は出來てゐたものご信ずる。兎も角も明石山禪源寺なるものは、賀名生史蹟の研究に當り、必ず考慮を拂はるべきものであらう。

（大正一四・五・三一稿・二五・三・五補）